

【企画分析会議構成員コラム5】

国立精神・神経センター 精神保健研究所 中島 聡美

犯罪被害者類型別継続調査も3年目の最終年度を迎えました。本年は、パネル調査において継続的な調査結果が得られたことが特に意味のあるものと思われます。日本の犯罪被害者の調査においてひとつの集団を継続的に追って行った調査は今までに無く、時間の経過やその間の出来事、支援等が被害者の方の回復にどのような影響を与えたのかを見ることが出来る画期的な試みであったと思われます。もちろん調査には限界があり、今回の調査でもすべての方に3年間ご協力いただけたわけではなく、より重症であった方の経過を追うことはできませんでした。しかし、多くの方にご協力いただけたことで、重要な結果が得られたと思います。3年の長きにわたりご協力いただいた被害者の方には心より感謝申し上げます。

この縦断のパネル調査では、被害からある程度時間がたった被害者の方においても約4割の方に時間経過に伴う回復が見られることがわかりました。その一方、半数近くの方においては、むしろ状態が悪くなっているあるいは悪いままであると感じられているという深刻な状態が示されました。一般的に被害者は、時間がたてば回復されるように思われているかもしれませんが、実際には、長期間たっても、実際に精神健康や社会機能が損なわれていたり、回復を感じられない状態である方が多くいらっしゃることを重視する必要があります。また悪化を感じられている方では、精神健康や生活機能の不良、ネガティブなライフイベントが多い、二次被害を受けたと感じる程度が強い等、さまざまな苦痛や困難が生じていることが示されました。また、クロス集計の結果から、回復を感じられない方のほうが、加害者が逮捕されていない割合が高いことも示されました。

このことは、時効の問題も含め、司法的な結果が被害者や遺族の回復に影響を与えることを示唆しており、司法手続きを含めた体制や中長期の支援の拡充が重要であることを示していると思われます。

ご協力いただきました被害者の方のお気持ちを受け止め、今後の被害者支援に生かしていくようこれからも努めていきたいと思っております。